

20110124

2011年1月24日　日本テレビ 定例記者会見

〈 全文 〉

<発表>

細川知正社長：はじめに、今年はデジタル放送に完全移行する年です。地上波民放にとって極めて歴史的な年になります。今日は完全移行までちょうど半年前ですが、完全移行に向かってまい進していくと考えています。今年1年の様々な作業の大前提になつていています。

発表事項です。

1つ目は、「24時間テレビ」の福祉車両303台の贈呈式を昨年12月10日に行いました。昨年の8月28日、29日に放送した「24時間テレビ33『愛は地球を救う』」で、全国の皆様からお預かりした募金9億7,402万8,568円の一部で購入した福祉車両303台を全国の福祉団体・個人へ贈呈することを決め、日本テレビは担当地区であります、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川の46の福祉団体・個人に対して福祉車両を贈呈しました。あらためて皆さんに感謝申し上げます。

次に、日本テレビは「国連グローバル・コンパクト」に署名しました。「国連グローバル・コンパクト」とは1999年1月にスイス・ダボスで開かれた世界経済フォーラムで、国連アナン事務総長（当時）が「民間企業の持つ創造力を結集し、弱い立場にある人々の願いや未来世代の必要に応えていこう」と提唱した、企業の自主行動原則です。参加企業には、人権、労働、環境、腐敗防止等、CSR基本10原則に基づいた企業活動を支持し、実践することを求めていました。現在、世界140カ国、8600の企業や団体が加盟し、日本では128社が参加しています。日本テレビでは、すでに「24時間テレビ」やエコウイーク等独自の取り組みを進めていますが、今回の署名をきっかけに活動をより強化し、国内のみならず海外からも信頼されるグローバルな企業を目指します。

そして、2011年度の読売巨人軍主催試合の野球中継について概要が固まりました。地上波で22試合、BS日テレで61試合、CS放送の日テレG+で全72試合を放送する予定です。今年度の1つの特徴がBS日テレでの「トップ&リレーナイター」です。

大久保好男取締役：2011 年度の読売巨人軍主催試合の中継については、地上波 22 試合、これは 2010 年度と同数です。ナイターとデーゲームの内訳に変更があり、ナイターは 7 試合と 2010 年度シーズンの 8 試合から 1 試合減り、デーゲームは 15 試合で 1 試合増えます。

BS 日テレは昨年同様 56 試合を中継します。それに加えて「トップ&リレーナイター」という形で 5 試合を追加して放送します。この「トップ&リレーナイター」は、地上波中継前後の試合の模様を BS 日テレで補完する形で中継します。地上波では試合が 21 時以降に延びた場合、放送時間の延長が難しいケースが往々にしてあります。試合の途中で中継が終わると野球ファンにとっては非常にフラストレーションが高まります。できるだけ野球ファンのご要望に応えたいと、このような形式を初めて導入します。

CS 放送の日テレ G+は 72 試合を中継し、これも昨年同様です。2011 年度のプロ野球中継については、地上波と BS 放送、CS 放送、3 波の総合編成という形をより強化し、新しい野球ファンも開拓していきたい、そしてスポーツコンテンツとしてさらに成長発展させていきたいと考えています。また今年 7 月 24 日以降はフルデジタル放送になりますので、それを活かしてデータ放送等も充実させていく予定です。さらに、3D 放送等も環境が整いつつありますので、いろいろ工夫してプロ野球中継をより楽しんで頂きたいと考えています。今年度は「ドラマチック」をキーワードに、投手と打者、ライバル、新旧等、選手の「対決のドラマ」を徹底的に映し出すことで、皆様の心に残るプロ野球中継を目指します。

1. 視聴率の動向と当面の編成戦略

大久保取締役：続いて視聴率についてです。先週の視聴率はゴールデンタイム、全日、ノンプライムタイムでは 1 位を獲得することができました。またプライムタイムは 2 位でした。

一方、2010 年の年間視聴率は全ての時間帯で 2 位でした。1 位はフジテレビで、私どもとしては首位奪還を目指していましたので残念な結果ですが、フジテレビには敬意を表したいと思います。しかし、1 年を通して日本テレビの目標としてきた「視聴者に支持される番組づくり」という点ではかなり前進したと捉えています。ゴールデンタイムではトップとの差を 0.4 ポイントも縮めて、0.7 ポイント差まで迫っています。プライムタイムは前年が 0.8 ポイント差でしたが、こちらも 0.4 ポイント差まで詰めています。このように着実に視聴率は前進していますし、さらに私どもが意識してきた若い世代の視聴率も急激に伸

びてきています。その意味では、首位奪還はなりませんでしたが、トップの背中が見えてきた1年だったと考えています。この勢いを2011年も続けて念願の首位奪還を目指す、それが私どもの今の目標です。

記者：年末年始に放送された番組の総括と視聴率動向をお願いします。

細川社長：箱根駅伝、特に復路に関しては史上3位の視聴率を獲得しました。多くの皆様にご覧頂き、感謝申し上げます。箱根駅伝を含め、年末年始の番組編成全体に関しては一定の評価ができると考えています。

昨年1年間を総括すると、全体的には良い方向だと捉えています。ただし当初の目標であったトップになったわけではありません。従ってその課題は変わらず残っていますので、今年も攻めの姿勢でやっていこうと考えています。

大久保取締役：日本テレビは12月20日から1月9日まで3週間、年末年始の特番を編成しました。この期間、全日とノンプライムタイムの2冠を獲得し、ゴールデンタイムとプライムタイムは2位でした。年末年始には高視聴率の番組が多くありました。特に大みそか恒例の年越し特番「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!!大晦日年越しSP!!『笑ってはいけないスペシャル24時!!』」が紅白歌合戦の裏で15.3%と民放でトップでした。また箱根駅伝は素晴らしいレース展開で非常に緊迫したトップ争い、シード権争いとなり、復路は29.5%と箱根駅伝中継の中では歴代3位の高視聴率を頂きました。その他にも、「ぐるナイゴチ12新メンバーは　さんSP」も21.0%と高視聴率でした。個々には良い番組が数多くあったのですが、ライバル局もしっかりと視聴率を獲得され、ゴールデンタイム、プライムタイムでは2位となっています。

記者：1月期ドラマの評価をお願いします。

大久保取締役：水曜ドラマが香里奈さん主演の「美咲ナンバーワン!!」で、キャバクラ嬢から先生になるストーリーです。初回は13.2%の視聴率でスタートしました。土曜の「デカワンコ」は多部未華子さん主演の刑事ドラマで、1回目は13.0%でした。それぞれ2回目は12%台ですが、ますますの推移と捉えています。特に注目して頂きたいのは、スポンサーニーズの高い若い世代の皆様に2つのドラマをご覧頂いていて、他局のドラマに比べて非常に高い支持を得ているということです。世帯視聴率がより高い番組はたくさんありますが、若い世代が最も観ているのは「美咲ナンバーワン!!」と「デカワンコ」だという結果が出ていますので、今後さらに視聴率が伸びていくことを期待しています。

記者：4月改編の状況はいかがでしょうか。

大久保取締役：4月の改編は現在作業中ですので、改めて作業が進んだ段階で正式にお話しします。基本的な考え方としては、弱いところを強化し、そしてフルデジタルの時代に合わせて新番組への挑戦もしていきます。

「ズームイン!!SUPER」の次の番組についてご説明します。名称は「ZIP!」で、4月から変わります。「ZIP!」とは「ZOOM IN! PEOPLE」を略した名称です。「ズームイン!!SUPER」の後継番組ですが、同時に新しい形に発展させるためMCは榎太一アナウンサーと関根麻里さんになります。また2人だけでMCをするではなくて、一緒になって番組を進行するMCチームとしてメンバーをそろえていく方向で考えています。「ZIP!」はコンピュータのデータ圧縮でも同じ名称があり、いろいろな情報が飛び出してくるという意味合いもあります。さらに英語の口語では「元気に」という意味もあるそうです。この新番組を観て頂いて元気な日本の朝をつくりていきたい、「日本の朝をHAPPYにし、日本にエールを送る」というのが新しい番組のコンセプトです。主題歌は山下達郎さんに書き下ろしをお願いしていますので、こちらもご期待頂きたいと思います。

記者：長い歴史のある番組を終えて、一から新しい番組をスタートさせるわけですが、どういうご決断だったのか教えて下さい。

大久保取締役：「ズームイン!!SUPER」は非常に素晴らしい番組で日本テレビの看板でありましたが、より良い番組をつくりたいという強い現場の決意がありました。これからさらに10年20年と新しい飛躍のできる番組にしていこう、新たな挑戦としてスタートすると受け止めて頂きたいと考えています。

記者：巨人戦の地上波中継が昨年と同数になった理由を教えて下さい。

大久保取締役：プロ野球中継の地上波視聴率はこのところ年々低下している事実があります。一方でBS放送は中継試合数を増やし、キラーコンテンツとしてさらに成長が見込まれる状況です。とは言え、BSデジタルの視聴可能世帯は約6割の状況です。そういう意味ではBSだけでの中継となりますと、広く全国でご覧頂けません。地上波で観たいという要望がまだ強くあり、また地上波にとってもまだまだ優良なコンテンツであると考えています。先々のことは申しあげられませんが、現状ではBSの視聴者にも配慮しながら、地上波でも観て頂けるように、地上波中継は昨年と同数で良いと判断しました。

記者：「トップ&リレーナイター」では、19時から21時まではプロ野球中継とは違う番組を放送するのでしょうか。

大久保取締役：BSの「トップ&リレーナイター」の方針として、地上波で中継している間はBSでは中継せず、別の番組を編成することになります。

記者：「トップ&リレーナイター」は地上波で放送するナイターのうちの5試合を補完するということですか。

大久保取締役：BSで中継する56試合は、18時から始まり21時、あるいは延長の場合はさらにと、従来の形式で放送します。地上波で放送するナイターの7試合はこの56試合に入っています。従って、地上波ナイター7試合のうち5試合が「トップ&リレーナイター」になりますので、BSの放送試合数は「トップ&リレーナイター」を入れると61試合です。つまりジャイアンツ中継が2010年シーズンよりも拡大しますので、日本テレビ、BS日テレとしては野球中継にさらに力を入れているとご理解下さい。

記者：「トップ&リレーナイター」を除いて、BSの56試合と地上波22試合は重複しないのですか。

大久保取締役：昨シーズンもデーゲーム等では地上波とBSで同時に放送している例があります。同様に2011年度シーズンも同時放送があります。

2. 営業状況と放送外収入の動向

記者：営業状況と放送外収入の動向についてお願いします。

細川社長：3月までの営業状況は大きくは変わっていません。タイムセールスがあまり上がりず、スポットセールスが好調です。しかし、タイムセールスも上半期に比べると前年同期比の下降率は少し下がり、レギュラー番組で約95%、上半期は約93%でした。ゴールデンタイムのレギュラー番組のネットタイムセールスは1月-3月がほぼ完売しました。一方、スポットセールスに関しては前年比で言えば極めて好調と言えます。エリア平均で1月のスポットセールスは前年同期比120%を越えていますし、2月も少なくとも前年同期比110%の後半には行く見通しです。3月は金額が大きいのですが、かなり良かった昨年を多分上回るだろうと見ています。スポットセールスははっきりと下げ止まり、一昨年を上

回っている実感があります。

通期ではタイムセールスの落ち込みよりも、スポットセールスの増加が大きいと見てていますので、放送収入についてはそのような結果が出せるのではないかと考えています。

一方、放送外収入では、事業関係は前年度が非常に良かったため、年間を通して前年度比での增收は難しいと見てています。この落ち込み幅がどれくらいになるかによって会社全体の単体での增收になるかどうかが決まると考えています。

4月以降の見通しについては、スポットセールスに特別暗い見通しはありません。一方、タイムセールスはそれほど良い状態になるとは考えていません。焦点は2年続けて前年同期比で落ちたタイムセールスがはっきり下げ止まるかどうかです。タイムセールスが前年同期比100%を越えるといろいろなことが考えやすくなると思います。

3. 地デジの進捗状況

記者：地デジ完全移行までちょうど半年前ですので、半年のラストスパートでの取り組みと、進ちょく状況をお願いします。

細川社長：昨年12月末でデジタル受信機の普及台数は1億台を越えましたので、想定通り進んでいます。毎回申し上げていますが、送り出す側の放送局の準備はほぼ完全にできていることは間違いないありません。また視聴者の皆様への告知も入念に行ってています。多少「告知」が多いと指摘されても、さらに強化して告知していくと考えています。そしてデジタル受信機をご購入になりにくい皆様への対応については、政府の施策を含めて行われていますので、こちらの告知にも協力していきます。とにかくできることは何でも行い、7月24日以降に視聴者の皆様にご迷惑をお掛けしないよう、そして私たちの媒体力が落ちないよう、ありとあらゆることを行っているのが現状です。今のところ私どもができる範囲のことに関しては、ほぼ順調に進んでいると判断しています。

4. その他

記者：NHKの会長選びの総括と、新会長に期待することを聞かせて下さい。

細川社長：新しく会長に就任される松本正之さんは、報道によれば非常に立派な方であると伺っていますし、公共性の強い組織を率いるという意味でご適任だと思います。また、デジタル完全移行半年前ですから、NHKとも全面協力しなければなりません。ぜひ民放局である私たちの取り組みを十分ご理解頂いて、一緒にやっていけることを強く期待しています。

いわゆる受信料で経営する形態と、私たちのように広告収入を主として経営させて頂いている形態、放送の2元体制で50数年間にわたり協調してきた、一定の放送文化を維持してきたと思っています。そうした背景をご理解頂き、一緒にいろいろな問題に取り組んでいきたいと考えています。

記者：現在のNHK福地会長は今日が任期の最後の日です。福地会長についての評価をお願いします。

細川：アサヒビール株式会社を巨大な素晴らしい企業に成長させた方ですから、とてもおこがましくて評価などできません。福地会長のご助力もあって、私たちは昨年からエコウィークをNHKと一緒に取り組んでいます。一緒にいろいろなことをやって頂ける方でしたし、その意味で感謝も致しています。

(了)